年額金百二十兩、閏月があれば百三十兩と定まつてゐた。諸士に貸附する方法の會所銀と同樣であつたことは、御定書に載せられる聖堂銀一卷の條に見える。

セイドウナラビニガツコウウケトリビケシ 聖堂並學校請取火消 →ウケトリビケシ 請取火消。

セイトクイン 盛德院 加賀藩主第六代前田吉德の女で、佐竹義眞夫人になつた楊姉の法號。詳しくは盛德院巨海窮仙大姉。

セイニユウジ 誓入寺 河北郡二日市に在つて、眞宗東派に屬する。初め石川郡倉谷鑛山に建てられたが、その衰頽するに及んで天和二年三月今の地に移つたといふ。

セイネンジ 誓念寺 金澤百姓町慶覺寺の向小路西側に在つて、眞宗東派に屬した。寺記に、元和四年慶恩之を石川郡松任に建て、寛永三年金澤に轉じたとある。後學習といふ者東本願寺別院の御堂坊主を勤めてゐたが、安政二年十一月十六日堂宇に火を放ち、遂に露顯して磔刑に處せられ、誓念寺は破却を命ぜられた。

セイハクサイ 青柏祭 鹿島郡府中に鎭座する大地主神社で、舊四月中の申日（今は五月十四日）に行ふ祭儀を青柏祭とも山王祭ともいうた。府中は卽ち王朝に於ける國司廳の地で、神饌を柏の葉に盛る古儀が遺つたものと見える。又柏祭ともいうたらしく、提要の能登釜に『柏祭。旅いづこ枯る柏にもる神供』とある。當日隣接七尾なる府中町・鍛冶町・魚町に飾られる山車は、上部の廣い梯形の屋蓋が丸太などで組立てられ、蓆や幕で外面を蔽ひ、その內に歌舞伎がかりの裝置を施したものである。

セイハンザツワ 聖藩雜話 大聖寺藩人の著秘要雜集の別本で、數項の記入がある。この書入は野尻政勝の日記及び毛合村一件留書から取つたものと見える。

セイハンネンプ 聖藩年譜 大聖寺藩士土田治兵衛信綱の著で、寛永十六年六月から天保十一年五月に終る年譜である。編纂は弘化三年六月に完成したが、著者は尙聖藩年譜草稿と題してゐる。

セイフウ 青楓 →オクムラセイフウ 奧村青楓。

セイフウシユウロ 青楓秋露 三冊。富田景周の冊青楓奧村氏の詠歌集である。

セイホウイン 盛芳院 慶祐法印と稱する。京師の醫師。前田利長の病むや、慶長十六年六月之を高岡に招いて病を診せしめた。利長が慶祐に與へた起請文の宛名には、盛方院と記されて居る。

セイボノシユウギ 歲暮祝儀 (一)城中—藩政時代に頭分以上の士は、十二月廿八日歲暮祝儀の爲に登城し、各姓名を帳に記して退出した。この日城中諸門の番人は皆常服を用ひるが、祝賀の爲登城の者と奏者番とのみは麻上布を着ける。同日、年男たるべき會所奉行は、熨斗目・麻上下を着て出仕し、具足の鏡餅を藩侯居室の床の間に飾る。藩祖前田利家の用ひた具足も亦同所に飾られ、年寄奧村氏はこれに鏡餅一重を供へた。(二)民間—民間にあつては、十二月廿五日頃から、歲暮を祝して互に物品を贈答した。

セイミヨウイン 淸妙院 加賀藩祖前田利家の子模知姉の法號。詳しくは淸妙院花夢貞香大姉。

セイミンノエキ 征明の役 文祿元年（天正二十年）正月七日、是より先前田利長は北陸に留守して居たが、此に至つて麾下に命じ、日を刻して征韓の役に從はしめ、二月下旬自ら京師に入つた。三月朔秀吉先鋒の將士は京を發し、利家も亦十六日途に就き、四月中旬肥前名護屋に着して營を構へた。五月秀吉、利家をして朝鮮に入つて諸軍を統べしめようとしたが、偶明主大擧來援の報に接し、自ら赴き戰はんと欲した。而も利家の家康と共に諫止した爲に、六月二日令を軍中に布いて、明年三月出發の事に定め、而して七月大政所の病篤きに會うて、軍事を家康・利家に託し、急遽京に歸つた。次いで九月七日秀吉前議を改め、利家に征明都督を命じたが、既にして明軍又退却せんとすとの報があつたから、廿一日都督の職を解いた。十月六日秀吉再び名護屋に向かひ、十四日には在京の利長が能登に命じて秀吉の乘艦を造る爲能登の巨材を伐採せしめた。これ秀吉が再び明年三月の渡航を擘畫した爲である。是を以て利家も亦文祿二年正月三日書を三輪藤兵衛に致し、兵艦五隻に要する船具・水夫を發遣すべきを命じ、渡海の準備に着手した。是の月利家は蒲生氏郷と共に第二軍の將たることを命ぜられ、秀吉の親征も亦實行せられんとしたが、時局急轉し、明は利を失ひて媾和使を送るとのことであつたから、利家は更めてその接待に當ることゝなり、五月十五日から廿一日に至るまで副使徐一貫を賓待し、家康は正使謝用梓を享侑した。爾後は諸將相代つてその任に當つたのである。既にして明使國に歸り、媾和は未だ成るに及げなかつたが、八月淀君の秀頼を生むに及び、秀吉は廿五日倉皇名護屋を發して大坂に歸つた。利家も亦尋いで還り、閏九月廿二日秀吉に謁し、十一月暇を得て金澤城に入つた。三年二月利家大坂に上り、次いで京都・伏見の間を往復したが、十二月歸つて國政を視、四年正月又上洛し、三月六日秀吉は江州今津及び弘川の地を與へて、往返の旅次に便ならしめた。翌慶長元年八月明使楊方亨・沈惟敬伏見に至り、利家は命を受けて惟敬をその第に居らしめた。既にして明使が大坂城に秀吉に謁して封册を與へたことによつて和成らず、二年正月再征の軍を發したが、この役に在つては秀吉の意氣舊の如くでなく、利家も亦行營を進めず、三年八月秀吉の薨去に會し、家康と共に在外の大軍を收容するの難局に當つた。

セイメイシヨウギ 西銘詳義 一冊。張橫渠の原著を釋義したもの。室鳩巢の著で、大地昌言外二人の同校に係る。

セイモンニツキ 誓文日記 一時前田氏に仕へてゐた可兒才藏が、自ら末森後卷・筑紫陣・關東陣から關ヶ原役に至るまでの實歷を記したもの。才藏は後に京師に隱棲したが、その子某世を早くし、某の子友庵醫を業としてこの記錄を傳へたのを、元祿七年加賀藩の醫坂井順安京に在つて之を得、前田綱紀に上つた。卷初に誓文が記してあるから名づける。

セイヤ 青野 →ツダヨウ 津田蠢。

セイユウカン 齊勇館 明治三年加賀藩の兵制を英式から佛式に改め、兵隊の屯所を設けた際、急に幹部たるべき士官養成の必要を生じ、十一月城內二ノ丸に於ける舊藩侯の殿